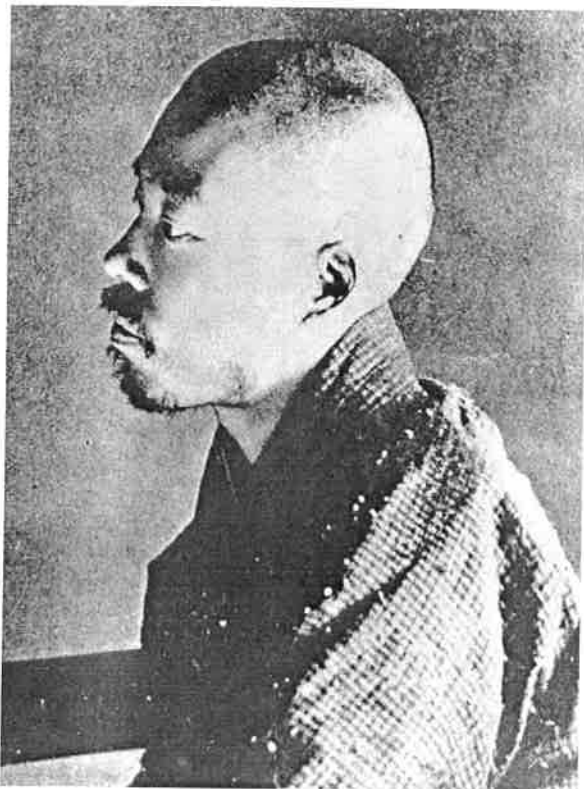


南方熊楠翁生誕 150 周年記念

熊楠とゆかりの人びと 第30回

正岡 子規



【略 歴】

俳人、歌人。本名、正岡常規（つねのり）。別号、獺祭書屋（だっさいしょおく）主人、竹の里人。幼名、処之助（ところのすけ）、また升（のぼる）。1867（慶応3）年10月14日（旧暦9月17日）、伊予国温泉郡藤原新町（現・松山市新玉町）、正岡隼太、八重の次男として生まれる。父・隼太は松山藩の下級藩士。1883（明治16）年、松山中学校を中退して上京。共立学校に入学。1884年、随筆『筆まかせ』を書き始める。同年、東京大学予備門に入学。1889年、同級の夏目漱石と親交を結ぶ。同年、喀血続き、時鳥の句を作る。子規と号す。1890年、東京帝国大学文科大学哲学科に入学。翌年、同国文学科に転科。1892年、新聞「日本」に『獺祭書屋俳話』を連載。俳句革新運動の先駆けとなる。同年、大学を中退。日本新聞社に入社。1895年、日清戦争に従軍記者として赴くが、帰途、喀血し、以後は長い病床生活に入る。脊椎カリエスに悩まされながらも、1898年には『歌よみに与ふる書』を発表し、短歌革新に着手。更に『墨汁一滴』（1901）、『病床六尺』（1902）を発表。『仰臥漫録』（1901～1902）をしたためる。1902年9月19日、死去。

【展示内容】

- はじめに
- 共立学校
- 東京大学予備門
- 正岡子規に関する南方熊楠の回想
- 二人の共通点

※画像：松山市立子規記念博物館提供

◀正岡子規写真（明治33年12月24日）、▲草花図

主催：南方熊楠顕彰館

共催：（公財）南方熊楠記念館

この展示は平成29年6月3日から7月2日にかけて南方熊楠顕彰館（田辺市）で開催した第47回月例展の巡回展です。

※特に表示がない資料は南方熊楠顕彰館（田辺市）の所蔵資料です。